

宗教者災害支援連絡会 第8回情報交換会議事録 H24年3月18日 (文責：井関大介)
「東日本大震災発生以後の1年を顧みて」
朝岡勝氏(日本同盟基督教団)

報告者は普段は東京の教会で牧師をしているが、震災の支援活動に携わって以来、現地との間を行き来する日々を送っている。報告者が所属するのは日本同盟基督教団という小さなグループ(全国で教会が約230、信者が約1万人)であり、3月14日に教団内で震災の対策本部が設置されて以来、その実務を担当してきた。14日夜に福島県いわき市に向かったのが最初で、岩手県の宮古、山田、釜石、大船渡、陸前高田、気仙沼、宮城県の南三陸、女川、石巻、仙台市内、福島県の相馬、いわき、福島市、郡山等、各地にある教会を中心とした支援のはたらきに携わっている。

プロテスタント系の場合は各教会・教団の独自のはたらきが多く、その全体をどこかの組織が把握しているということはない。多くの教団・教派が所属する緩やかな集まりとしてはNCC(日本キリスト教協議会)やJEA(日本福音同盟)という団体があるが、各教団・教派が独自にできることをしているというのが現状である。キリスト教会の中でも特にプロテスタントの教会は数も少なく、全国的な組織が明確な方針を出すというわけではないため、できるはたらきは非常に限られたものであり、動員面でも資金面でもささやかなはたらきをしているというのが現状だが、小回りのきく少数者だからこそできることもあると考えて、他の方々の活動の間の隙間ができてしまうようなところを頼まれてお手伝いしている。行政から「あの地区は手薄なので訪問してほしい」と依頼されて請け負うといった形で、在宅の避難の方々をお訪ねするような地道なはたらきをしながら一年を経てきた。

実際の活動は緊急支援として物資を集め被災地に届けることから始まり、今は仮設住宅の集会所等を使って、そこに集まって来る方々とお茶を飲みながら当時の話を聞かせていただいたり、その中で色々な苦労を分かち合わせていただく、コミュニティカフェという活動を続けている。また、仮設に入れず自宅にいるが、なかなか行政の手もいき届かないような一人暮らしのご老人や、社会的な弱者の方々のもとを定期的に個別訪問する中で徐々につながりが生まれ、ニーズをうかがってしかるべき所につなぐというように、なるべくその地域の中で果たせる役割を果たしている。

また、特に福島ではやはり原発の問題が非常に複雑で、教会は子供達を中心に色々なプログラムをしている関係で地域の母親達とつながりがあるが、「子供達を空気のきれいなところでのんびり遊ばせたい」という声が多い。福島のプロテスタントの教会では今、猪苗代で売りに出していた企業の保養所を様々な所からいただいた資金で購入し、現地に留まらざるを得ないご家庭の子供達に楽しい時間を持ってもらうため、「保養疎開」という取り組みを始めている。週末ごとに子供達が母親と一緒に来て、元気いっぱい遊んで帰っていく。

聖書に「いと小さき者のひとりにしたことは、すなわち私のためにしたのだ」ということばがあり、そのことばを心にとめながら、いと小さき者、特に子供達やこれから生まれてくる子供達、若い母親達のいのちを保っていくということが、これからは一つの大きな柱になっていくと考えている。報告者の教団の場合は、当初は行ける人が行ける所に行ける時に行くというように、あまり組織化・全体化は考えず、その時々が必要に応じて小回りがきく形で始まったが、一年を経て状況は変わっていくものの、自分達がしたいことよ

り現地で必要とされていることになるべく沿う形で、できることはやり、できないことはできる所につなぐというのをポリシーにしながらやっていきたい。

地域の方から「教会さんは一生懸命やっているけれども人が少ないので、あまり目立たない。もっと上手にアピールしたらいい」「見せ方が下手だ」と言われるが、それが自分達のあり方だと思っている。聖書に「右手のしたことを左手にも知らせるな」というイエスのことばがあり、知られないのはむしろ良いことで、誰にも知られないところで自然とその必要が無くなっていくということが一番の願いにしながら活動している。

また、キリスト教の伝統の中にディアコニア (奉仕) ということばがあるが、ディアコニアに生きるキリスト教会が立てられていくことが必要なのではないか。報告者達自身の今後の課題として、教会自体も自らへのふりかえりということが一つの大事な仕事になってくると思う。そして、この日本における東北という場所の持つ意味を、キリスト教としては神学的に考えるということが必要ではないか。特に近代以降の日本の歴史の中で東北という場所の持ってきた意味を、聖書から東北を読み、また東北で聖書を読むという仕方であらうと考えていくということが、この先の復興を考える上で非常に大事なことはないか。

最後に、やはりいのちと宗教ということを経験者としてどう捉えていくのか、死ぬべき存在である人間が死をよく迎えるために何ができるのかということを考えている。それとの関わりの中で原発の問題というのは避けて通れず、カトリック教会は既に大事なメッセージを発しているが、プロテスタント系教会ではなかなか各団体の足並みを揃えられていない。報告者の教団でもまだ議論が十分に尽くされていないが、やはり神から預かった自然を正しく扱い、神様の前に人々が生きていくために、この原子力の問題に対して明確な態度を示す時が来ていると考えている。